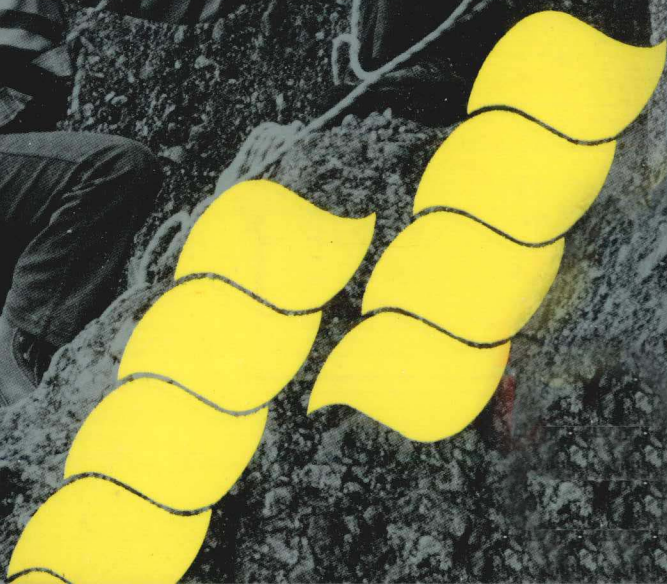


ザイルの二入

満則・秋子の青春登攀記

鳴 鳴
秋 満
子 則



著者略歴

鳴 満則

1945年 秋田県北秋田郡に生まれる

1981年 中国新疆省・コングールにて消息を絶つ

鳴 秋子

1949年 埼玉県東松山市に生まれる

1968年 埼玉県立松山女子高校卒

1970年 武蔵野ドレスメーカーデザイン

師範科卒。(株)エパニユー入社

1971年 (株)エパニユー退社

ザイルの二人

定価 九八〇円

満則・秋子の青春登攀記

一九八三年一月十日 第1刷発行

著者 鳴満則・鳴秋子

発行者 川崎吉光

発行所 株式会社 山と溪谷社

東京都港区芝大門一丁目三三

郵便番号 一〇五

電話 東京(03)四三六(四〇二一)代

振替 東京八六〇二四九

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社 若林製本工場

©鳴満則・鳴秋子 一九八三年 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えないいたします。

8521

ISBN 4-635-04137-9

山溪ノンフィクション・ブックス

ザイルの二人

鳴鳴
秋満
子則

満則・秋子の青春登攀記

カバー・表・写真 小森康行
カバー・裏・写真 嶋満則
ブック・デザイン 井上敏雄

*
目次

夫との出会い（秋子）

1 一九七三年・夏

33

初めてのモンブラン、ブレンバ・リッジ登攀（秋子）

2 一九七六年・冬

49

モンブラン、ブレンバ・フェース・マジヨール冬期単独初登攀（満則）
モンブラン、ブレンバ・フェース・ポワール冬期単独初登攀（満則）

3 一九七六年・夏

93

モンブラン、センチネル・ルージュ登攀（秋子）
ブラン針峰、ライアン山稜二十四時間の登攀（秋子）
エギーユ・デュ・ミディ北壁フレンド側稜、嵐の中のビバーク（秋子）
エギーユ・デュ・ミディからグラン・シャルモの縦走（秋子）

4 — 一九七八年・冬 — 157

凍てついたマッターホルン北壁を妻とともに（満則）

5 — 一九七九年・冬 — 221

モンブラン、ブレンバ・フェース、グラン・クロワール冬期初登攀（満則）

6 — 一九八〇年・冬 — 251

モンブラン、フレネイ中央岩稜冬期単独初登攀（満則）

7 — 一九八一年・冬 — 279

モンブラン、ブトレイ大岩稜北壁ボナッティ・ザッペリ・ルート冬期第三登を
終えて（秋子）

エピソード — 301

コングールに逝った夫（秋子）

鳴 満則・略年譜 — 314

プロローグ

夫との出会い——しぎ 鳴 秋子

六月の衝立岩や烏帽子岩は、太陽にキラキラとまぶしいばかりに輝いていた。ひざを痛め医者から山登りを止められていた私には、それはよけいにまぶしく思えた。

テールリッジの岩の上で横になりじっと目をつむると水の音に混じって、カランカラんと岩に当たるアブミの音が私の耳を楽しませてくれた。谷川岳は通い慣れた山であった。そして、大好きな山でもあった。こうして山の中にいるだけで、不思議と心が安まる場所でもあった。

一時間ほど昼寝をしただろうか。ブヨに悩まされてとうとう退散する羽目になってしまった。いま登ってきたばかりのテールリッジをぶらぶらと歩き、マチガ沢出合まで来た時、どこかで見たような人と出会う。

「やあ、昨晚はどうも……」

「……ああ、こんにちはー」

彼との出会い、そして不思議な縁がここから始まった。

昨夜、私は友だちの車で登山指導センターに着き、いつものようにシュラフに入りセンターのイスで横になっていた。うとうとし始めたころ警備隊の友だちに起こされた。

「いつも谷川岳に来る、変わった女の子が来てるから紹介するよ」

友だちは、腕に私のことをそう話したらしい。

変わった女の子……、確かに毎週のようにヘルメットを持って岩登りに通っていた私は、変わり者だったのかもしれない。

「長崎です、初めましてー」

彼はそう名乗った。彼はヨーロッパに行くため会社を辞めたという。山の話、世間話、そしてその晩は終わった。

マチガ沢での出会い——くわしく言えば、二人にとってマチガ沢での出会いは二度目の

出会いだった。

縁、それは不思議なものだと思う。何も知らない者同士がふとしたことから知り合い、やがて結婚する。縁というものがあるとしたら、やはり私たちは不思議な縁で結ばれていたのかもしれない。

夫の故郷は秋田県である。小さいころから自然と接するのが大好きだったという。話の中によく森吉山の話が出てきた。彼が初めてひとりで登った山だという。家から遠くに見えるその山をどうしても登りたくなくなり、地図を調べ、ひとりで列車に乗り込んだのだ。そしてその山で味わった感動を、その時と同じように興奮してよく私に話してくれた。

兄弟の多い彼、彼は七人兄弟の六番目だった。そして一人っ子の私……。

私もまた自然の中にいるのが好きだった。というよりもひとりで家にいる寂しさをまぎらすのに、山は格好の場所だったのかもしれない。中学、高校時代に、奥武蔵の山々を片っぱしから歩き回った。家の中にいる時のような寂しさや孤独感は山の中では一度も感じたことがなく、不思議なぐらい私は山に溶け込んでいった。

別々の違った世界に育ってきた二人に共通のものがあるとしたら、それはさみしがり屋だということだろうか。本当はひとりでいることに耐えられないくせに、いつも意地を張って生きてきた。夫が単独登攀を始めた時、よくこう言っていたのを覚えている。

「単独をやる人間はみんな臆病なんだ。だから単独ができるんだ。ひとりで岩壁の中にいると寂しくてたまらなくなる。怖いからよけい慎重にもなる。だから登り切れるのさ」

私にとって夫は一番の話し相手である。彼の笑顔が大好きだった。いつも静かに笑って私の言うことにうなずき、特別あしろこうしろということはなかった。

その中で、二つだけ文句を言うことがあった。

「たまには山の道具の整理をしろよ、カビが生えても知らないぞ！」

「原稿書けよ、原稿！」

それ以外はいつも笑って話を聞いているだけだった。彼がそばにいないとなぜか不安になったのは、その笑顔のせいだったのだろうか。

彼にしてもあるいはまた同じだったのかもしれない。年が離れた兄たちと話すこともなかったその寂しさがいつしか山へと向かわせたのだろうか。

二人のさみしがり屋がふとしたきっかけで谷川岳で知り合った。そして、それもまた一つの縁であったのだろう。

たった数日ののち、彼はヨーロッパに出発していった。そして一年間の手紙の交換、一年後のシャモニでの再会、そのどれもが私たちの縁であったような気がする。

初めて結婚の約束をしたツエルマットのシュワルツゼー、初雪を置いたマッターホルン

のふもとに建つマリア堂で二人は二つの約束を交わした。一つは結婚、そしてもう一つは二人でずっと山登りをつづけてゆくことだった。その日、マッターホルンとマリア様だけが二人の約束を聞いてくれた。お金のなかった私たちは小さなペンダントを交換した。私にとってそれはどんな高価な指輪よりうれしかったし、シュワルツゼーは私たちにとつて忘れることのできない場所となった。

そして四年後、私は彼とともにこのシュワルツゼーのマリア堂のそばに立っていた。冬のマッターホルン北壁を登るために。雪の中に静まり返る礼拝堂の中に、あの時と同じマリア様の顔があった。私たちは、今度は北壁登攀の無事と成功を祈り四年前と同じようにひざまずいていた。

人にはそれぞれの生き方がある。私は彼と結婚して、他の人たちとは少し違った人生を過ごしてきた。それはたぶん、私だけができたすばらしい人生だったと思う。

自分の生き方、考え方を良いにしろ悪いにしろけっして曲げようとしなかった夫を、私は尊敬していたし、そんな彼が好きだった。山に対して、それは特に強かった。他人に何を言われようと自分の山をけっして失わなかった夫を、私はずっと見つづけてきた。だが日常生活の中で、時にはそれが通らないこともあった。

田舎での古い習慣や近所との付き合いも時にはしななければならないこともあるのに、ま

るで子供がだだをこねるように私を困らせることもしばしばであった。私はそんな時だけ、威張って彼をしかってやった。山では絶対的に權威を持っていた夫も、こんな時には私に頭が上がらないのだ。すると、「わかったよ、わかったよ……」とそう言いながら、いつものように山の道具の中に消えてしまった。

夫のいる場所はいつも決まっていた。一つは私たちだけの部屋、山の道具だけを置いてある部屋だった。ここにおいて、いつも山の道具をいじくりまわしていた。一時間でも二時間でも、もしそのままにしておいたら一日でもその部屋から出ようとしなかった。そしてもう一つは、二階の机の前だった。いろいろなところから原稿の依頼があるたびに彼はここから離れなかった。ひと通り書き終えたと、「ねえちょっと読んでみてくれる？」とそう言って私に必ずそれを読ませた。

私たちの生活の中心は、常に山であった。仕事柄というだけでなく、二人にとって山は生活のすべてだったような気がする。

一つの登攀が終わるたびに、私たちはけんかをしなくなっていた。結婚当時は実にささいなことでもけんかをした二人だったのに。冬の登攀の厳しさの中で、より深い絆で結ばれていったのかもしれない。生死をともにし、その中で一緒に生き抜いてきたという思いがそうさせるのであろう。

山の中で、二人は時々顔を見合わせては、「私たちは夫婦でよかったね。だってこんな姿、恋人には見せられないものね」。だるまのように着ぶくれた体、寝不足の顔、お互い顔を見合わせては笑ってしまうのだった。

*

私たちが谷川岳で知り合ってから三年が過ぎていた。初めてザイルを組んで登ったヨーロッパ・アルプスの岩峰から、私たちはいままた谷川岳へ帰ってきた。そして二ノ沢右壁から第三スラブへの継続登攀に四度目のアタックを開始しようとしていた。薄暗いテールリッジへの道を、ただ黙々と歩きつづけた。

一ノ倉沢は薄気味悪いほど、物音一つない静けさの中にあった。これから私たちが行おうとしている登攀、それはまだだれもが成し得ていない二本の長大なルートを一日で継続しようとするものだった。

夫はこの計画を話した時、私にこう言ったのだ。

「これぐらいの長いルートを一日で登り切れるぐらいのスピードがなければ、ヨーロッパの長いルートは登れないんだぞ」

一九七三年、初めて訪れたヨーロッパ・アルプスで私は苦い体験をした。それまで谷川